

『志』を高く！～炎^もえる中大生～

キャリア支援チーム『tip』

社会と関わり、視野を広げよう、と業界研究企画

参加した就活生に不安消え、意識変革が芽生える

「中大生は社会との関わりが薄い。もっと自分の視野を広げる活動が必要なのではないか」。

こうした問題意識から、キャリア支援チーム『tip』は昨年、立ち上がった。メンバーは当時4年生の

磯田美美さん(今春、法学部卒)、山岸怜奈さん(今春、総合政策学部卒)、渡辺千尋さん(今春、法学部卒)の3人。

社会とのつながりを意識

その3人が昨年、就職活動を終えて取り組んだのが、就活を迎えた後輩の3年生を対象にした「自分自身と社会とのつながり」をつくる企画。就活生を対象に参加を呼びかけ、業界研究を通して、就活する学生同士や社会人と関わることの大切さを

知って、キャリアデザインに生かしてもらおうというねらいで、活動をはじめた。

3人は、渡辺さんと磯田さんが英語の授業をきっかけに知り合い、渡辺さんと山岸さんは『特定非営利活動法人アイセック・ジャパン(AISEC in Japan)』という海外インターンシップを通じて、国際経済

社会を牽引するリーダーの輩出を目指す学生団体で知り合った。そして、渡辺さんを仲介に、磯田さんと山岸さんが出会った。

渡辺さんは、磯田さんと山岸さんを引き合わせた理由を次のように話す。「私たち3人は、中大生は社会との関わりが薄く、視野が狭い、という共通の問題意識を持つように

なっていたからです」。

海外インターンで目覚める

渡辺さんは高校までクラシックバレエを続け、プロになること夢見ていた。しかし、その世界は厳しく、夢をあきらめて、大学に進学した。

ただ、入学してからもバレエ以上にやりたいことが見つからずにいた時先輩から「インドにいけば考えが180度変わる」と言われ、インドに行った。

しかし、そこでわかったのは、「人間ってそんなにすぐに変えられるものじゃない」ということであり、「必ずしもベストな選択ができなくても、自分でその選択をベストなものにすることはできる」ということだった。

そうした考えに立って、渡辺さんが関わったのがアイセック・ジャパンであり、2009年度にはアイセック中央大学委員会の委員長を務めた。また、法学部の「やる気応援奨学金」を積極的に活用し、行動範囲を広げていった。社会人や海外の人々など様々な人と出会ったことで、「自分

が社会の中でどこにいるのか。自分はどうしていくべきなのか、に気づくことができた」という。

社会と関わる楽しさと大切さを知った渡辺さんは、3年生の後期になり就職活動をする中で、中大生に

は社会との関わりが薄い学生が多いと感じるようになっていった。

他方、山岸さんもまた、ゼミで地域社会と関わったことや、

等身大の自分を知る

『Hakumon ちゅう

おう』の学生記者の活動を通して、「いろいろな人と積極的に出会うことが大事」であることを体感。

「社会と関わることは、社会の中の等身大の自分を知ることになる」と強く自覚するようになった。

一方、磯田さんは「就職活動の際に社会との関わりをもつようになった。大学生活の中でもっと多くの人と出会えばよかった」と振り返る。3人は、それぞれ異なる大学生活を過

ごしながらも、社会と関わることの大切さを知り、多くの中大生にもそのことを知ってもらいたいと考えようになった。

それを実現させるために立ち上げたのが、キャリア支援チーム『EIP』であった。

3人は、大学のキャリアセンターと連携し、キャリア支援の対象となる就活を迎えた3年生と、内定を得て就活を終えた4年生に参加を呼びかけるとともに、キャリアコンサルタントや就職支援業務に携わる社会人にも協力を依頼した。

社会と交わり、意識に変化

その結果、集まったのは、3年生（就活生）が18人、サポートの4年生（内定者）が13人、社会人が6人。3年生はメーカー、商社、金融、マスコミ、サービスの5つの業界のグループに分かれ、昨年9月下旬から2ヶ月にわたって、4年生、社会人のサポートを得ながら、OB訪問やセミナーを開催するなどして、それぞれの業界を研究。この間、情報を

共有するためにLINEコミュニティも利用した。

グループミーティングや計6回の参加者同士の交流会と中間報告会を経て、11月19日に企画参加者と聴講生も交え、43人が集まって業界研究発表会を開き、研究の成果を披露し合った。

これを企画した3人が、イベント終了後に参加した3年生を対象に行ったアンケートでは、「自分の譲れないもの、価値観を人生で初めて見つめ直すようになった」「やらなきゃいけないことが見えた」「視野が広がった」などの意見が寄せられた。

山岸さんは、この結果から、「参加した3年生には就職活動に対する不安が軽減され、前向きに活動したいという意欲が読み取れる」と説明。「参加した学生の多くは、社会と関わる大切さを知ってもらえたと思います」と語り、イベントの成果に手応えを感じとっていた。

（学生記者 宮寺理子 II 法学部2年）



左から山岸さん、渡辺さん、磯田さん

『tip』 業界研究座談会

伝えたかった、出会いの大切さ 主催者

視野広がり、社会の立体感知 参加者

キャリア支援チーム 『tip』

磯田美美さん（今春、法学部卒・神奈川県立厚木高校出身）

山岸怜奈さん（今春、総合政策学部卒・東京都立立川高校出身）

渡辺千尋さん（今春、法学部卒・埼玉県立所沢高校出身）

業界研究参加者

荒井貴成さん（総合政策学部4年・さいたま市立浦和高校出身）

鎌田明子さん（経済学部5年・秋田県立秋田南高校出身）

松本和代さん（法学部4年・私立加藤学園映秀高校出身）

山岸 キャリア支援チーム 『tip』

では、「中大生は一般に社会との関わりが薄い。もっと視野を広げる活動が必要なのではないか」という問題意識から、昨年9月末から約2ヶ月間、3年生（当時）を対象に社会と交わって、自らが望むキャリアデザインを形成してもらおうための業界研究を行いました。きょうは、それに参加した3年生（当時）と、『tip』

を立ち上げた磯田、渡辺、そして私の3人で、活動を振り返り、とくに3年生がどう変わったかについて話し合いたいと思います。

業界研究は金融、マスコミ、メーカー、商社、サービスの5業界の各班に分かれましたが、まず、みなさんが研究した業界について、紹介してください。

業界の予備知識は本で

鎌田 私は、金融班でした。まずは金融業界に関する知識をつけようと、みんながそれぞれ本を読んでからOB訪問をしました。いろいろな社会人の方と会う中で自分たちの考えをまとめていきました。

荒井 自分は、広告代理店に就職したいと思っていたので、プレゼンスキルを向上させたいという理由でマスコミ班に参加しました。うちの班では参加者の興味が広告やラジオ出版などと違っていたので、各自が

興味ある業界のことをしっかり調べようということになって、本を読みあさりました。僕は5冊くらい読んで、一気に知識がついたなっていう感じはありました。

松本 私はメーカー班でした。こんなことを言ったら失礼かもしれないですけど、私の周りには、「口が上手ければ大丈夫だ」みたいなことを言っていて（笑）、真面目に就職活動してきた先輩がいなくて、本当にそうなのかなって思っていて、友達と情報共有しながらだったら、より効率よく就職活動が進められるんじゃないかと考えて、参加させていただきました。5人で業界研究とOB訪問、プレゼンをやりました。業界研究では、メーカー業界と関わりある商社班と情報共有できたのがすごくよかったです。

社会人に会う前に準備

山岸 参加した3年生には、まずグループで業界の知識をつけてもらって、その後に社会人を訪問して、自分たちの知識とか考えについて指



鎌田明子さん

導していただき、最後に研究発表してもらいましたが、最初、社会人に会っていただく時、戸惑いはあった？

荒井 ありましたね。電話するの
も、緊張するし…。

松本 私はOB訪問の仕方に関する本を書店で立ち読みしました。メールの書き方も、名刺の受け取り方も礼儀もよく分からないので、何



松本和代さん

か失礼があったら、いけないと思っ
て。

鎌田 私も不安でしたね。社会人
の方に会いに行く前に内定者の4年

生に相談したら、「質問をちゃんと
考えて行かないとだめだよ」って言
われても、どんなことを聞けばいい
のか分からなくて。でも、それも内
定者から聞いたり、友達と話し合っ
たりしていく中で、聞けばいいこと
が何となく分かるようになってしま
した。それを繰り返していくうちに、
あえて考えていかななくても、自然に
質問がポンポン出てくるようになり
ました。

山岸 私たちは、社会を見るには
いろんな視点があると思っていて、
それを知るには「OB訪問が大切」
と言っていたんだけど、実際に
OB訪問をしてみても3人は得たもの
がありましたか。

出会いが楽しくなる

鎌田 やっぱり社会人と学生って
全然違う。社会人は、すごいって感
じましたね。

松本 私は、いろんな社会人の方
にお話しをうかがって、人との出会
いがすごく楽しくなってきました。
社会人がどういう思いを持って働い

ているのかということに触れられる
のがすごく面白かったです。社会人
の方とは今でも連絡をとり続けてい
て、ESで困ったら、添削してくれ
たりとか、資料をいっぱい送ってく
ださったりしています。

荒井 僕は、自分なりに学生生活
を楽しんできたという自信があった
ので、就活も何とかなるだろうって
思っていたんです。でも、ある座談
会を聞きに行った時に、広告会社の
方が、「あなたが最も連絡を取る人
の顔を10人思い浮かべてみてください
い。その中に何人社会人がいます



荒井貴成さん

か？」という話をされたんです。僕
はゼロだった。その方は、「その10
人の平均年収が自分の将来の平均年
収になるんです」と言われたんです
が、自分を振り返ってみて、自分は
まだまだだな、ということをお学べた
ということがありました。

自分の狭さに気付く

磯田 視野が広がった？

荒井 そうですね。今までは学生
同士の中で完結している活動だった
ので、自分は結構やれるんじゃない
かという思いがあったんですけど、
社会人との中となるとやっぱり自分
はまだまだだと思えました。社会人
の先輩に、「君らが、すごいと思っ
ていることでも、何も別にすごくは
ないんだよ」みたいに言われて(笑)。
鎌田 数か月で、何十人という新
しい出会いができて、何か自分が今
までいた世界ってすごく小さいなっ
て思うようになりました。

渡辺 これまであまり社会人とは
会っていませんでした？

鎌田 会っていませんね。これ

までは、高校の友だちとかクラスやサークルの友だちとかの狭い世界でしたね。

渡辺 社会人と会っていなかったというの、必要性を感じていなかったから？

鎌田 なかったですね。私、出身が地方だから、東京にきただけで満足しちゃっていたのかな(笑)。大学の中だけでいろんな出会いがあったから、それで満足していたのかもじゃないですね。

山岸 大学の外に出会いを広げたほうがいいと思うようになったのは、どうして？

鎌田 都心にある大学と田舎にある大学ではモチベーションが違うなって、就活を通してすごく思いました。都心にある大学の学生は何かこう、あかぬけている(笑)。

松本 私もすごくそれを感じています。私は、いろんな人に会うのも好きだし、どんな外に出ていくのも好きなんですけど、周りの中大の友達からは「それ、チャライ」みたいに言われて(笑)。サークルなら

サークルだけで、自分のコミュニティを崩されたくないという思いが中大生はすごく強い気がします。

外にはすごい人がいる

磯田 居場所、求めるよね、中大生は。



磯田 美美さん

松本 すごいです。それって「もったいない」ってすごく思います。一方で、そういう人たちは、私たちの価値観が理解できないみたいで、よく議論はするんですけど。

渡辺 いつ頃から、そう思うようになった？



山岸 怜奈さん

松本 1年生のころから思っていました。他のサークルの子たちと交流しただけでも、友達は「うーん……」となるから、他大学との交流なんて絶対ないし、社会人なんてましてや全然ない。

荒井 自分の周りは結構、活動的な人が多いからそうでもないけど、でも、何となく中大はドメスティック(Domestic)だなとは思っています。

松本 そう、ドメスティックだと思います。すごく(笑)。

山岸 そういう人には、何を言いたいですか？

松本 それ、ずっと考えているんですけど、彼らには彼らの異論がある(笑)。でも、外に出会いを求めないのは、本当にもったいないなっと思っています。

荒井 僕ももったいないと思います。外に出ればいくらでもすごい人っているじゃないですか。身の周りに100人いて、すごい人がそのうち1人だとしたら、1000人いれば10人いるわけで、外に出たほうがすごい人に出会えるチャンスがいっぱいある。

松本 もっと成長に貪欲になってもいいのかな、というのはすごく感じますね。

磯田 外に出れば上には上がいるんだ、みたいな発見があるよね。

松本 そういう感覚も多分ないんだと思います。

内定者に就活の仕方教わる

山岸 人と会うのは楽しいから、もっと外に出たほうがいいという考えは、『To』が行ったアンケートでも如実に出ています。最初は、どう



社会との関わりについて熱心に語り合う出席者

やって人と会っていいかわからないとか、怖いとかいう意見が多くあったのが、業界研究を終えたあとのアンケートでは、「人に会うのが楽しいから、これから頑張ろうと思います」と前向きにガラッと変わってきています。

磯田 OB訪問で経験したことは、今後の就活に必ず生きてくると思う。ところで4年生の内定者とはどうでしたか？ 社会人よりは気楽に話せたと思うんだけど…。

鎌田 内定者は就活を終えたばかりなので、就活の仕方を分かり易く教えてくれました。OB訪問の時にはこれを聞いたらか、今の時期はこれをやってとか、アドバイスしてくれました。

松本 私は、内定者にはすごく感謝しています。私だったら内定を得たらどこか遊びに行っちゃうんじゃないかなって思ってた(笑)。遠くか

ら来ているのに遅くまで残って、一人ひとりの相談に乗ってくださった。内定者の方たちがずっとお世話してくださったからこそ、自分が成長して頑張らなければいけないという気持ちです。

山岸 そうか、そういう気持ちの支えにもなれたのね。

松本 はい。あと、ミクシイのコミュニティにも毎回、皆さんが長く細かく分かりやすく記入してくださった。時間を割いてくださって、本当に感謝です。

立体的に見えてきた社会

磯田 今回の活動を通して、自分の中で変わったと思うことは何だろう？

松本 いろいろな社会の仕組みが、立体的に見えてきた感じがします。

本だけでは、分からなかったことが、実際はこうなっているのか、という感じで。私、これまで、どういう生き方がしたいかとか、世の中がどうなっているのか、なんて考えたこともなかったから、それを教えても

らったのが、すごく大きいです。

渡辺 今までずっと自分だけの視点、自分だけの考え方で物事を見ていたのが、他の人の見方、考え方に触れて、多分切り口が変わって、立体的に見えてきたんでしょうね。ところで今回の経験をやるまでに、就職活動に対する不安はあった？



渡辺千尋さん

松本 私、1、2年生のころは全く将来のことも考えていなくて、「大丈夫、遊べ」みたいな(笑)感じだったんです。それが3年生になるころ、先輩たちが、手当たりしだいに会社を受けて、でもダメだったから、「俺

やっぱり公務員に行くわ」とかいう姿を見て、不安を感じはじめたんです。元気がない先輩の姿を見て(笑)、私もこうなるのかなと思つて。

鎌田 私も「もう、ここ(の会社)でいいや」つて就活をやめて、でも後になってから「本当にここで良かったのかな」とか言っている人を見て、私はしつかりやろうと思つようになつたんです。でも私は1年間留学したため学年が一つ上なので、周りに就活仲間がいなくて、1人でやつていくのはちょっと不安でした。就活を終わった友達からは「絶対、1人でやつちゃだめだよ」つて言われて。「病むよ」つて(笑)、すごく言われました。

就活には仲間が必要

松本 受験は1人でも何とかなるかもしれないけど、就活は絶対1人でやるべきものではないと思つています。情報共有やコミュニケーション、自分の分析をしてもらうには、仲間が必要です。社会人を紹介してもらうにしても、1人で動くよりも

効率がいい。仲間には精神的にも支えてもらっています。

鎌田 病むのになつて不安でしたけど、『tip』の活動直後は解消しました(笑)。今、また1人になつてきちゃっているから、ちょっと不安なんですけど。『tip』の活動で、仲間の大切さがわかつたから、もつと自分から仲間をつくらうという気持ちにはなつているところです。

荒井 僕も仲間と一緒にやつて、就活をチームでやるというのは、重要だと感じました。今は同じ業界を目指している友だちに会つたら、情報を教えるようにしています。

鎌田 私もそれに共感しますね。ただ、情報を待つているだけじゃなくて、自分からも情報を紹介してあげないと、自分にもこないというか、ギブ・アンド・テイクなんだなつて思いました。

荒井 本当にそう思います。今、それを実践しているところです。

成果は今後の活動如何

鎌田 逆に『tip』の先輩方に聞

きたいのですが、どうして後輩のためにこんなに一生懸命になれたんですか。

渡辺 何でしょうね。『tip』を立ちあげた時、私達3人には、中大の学生の視野の狭い状態について同じ問題意識があつて、もつと視野を広げるために出会いがすごく大切だという考えから、その出会いを後輩達に提供していかないといけないと思つたんです。それを就活にフォーカスしたのは、就活は学生みんなが考えるからで、就活をきっかけに出会える場をつくる。それが結果的に業界研究になつたということです。

磯田 そうだね。私も出会いが一番、原動力になつていと思う。本当にちょっとした出会いで、自分が変われたり、悩んでいることがそんなに大したことではないと気付けたりして、前向きになれる。実際に就活でそう実感したからこそ、出会いの大切さを伝えたいと思つたということです。

山岸 私も尊敬する社会人の方が3人いるんだけど、私にとつて原動

力となつているその3人の社会人に出会つたのは、沢山の人に出会う機会があつたからこそだと思つているのね。それでまず社会人との出会いのきっかけと、次に人に会うための基礎的なルールとかマナーを学ぶ機会を後輩達に与えられたらいいなと強く思つていました。

荒井 先輩方は今回の活動の成果をどう評価しているんですか。

渡辺 成果は、まだ全然見えませんが、多分、これからの就活でのみなさんの行動の如何によつて、見えてくるんじゃないかな。

山岸 大きいこと言っちゃうと、参加してくれたみんなの人生のプラスになつていけば成功だと言える。

磯田 みんなの話を聞いていて、自分たちが伝えたかつたことは伝わっているんだなと感じるので、それはひとつの成果と思います。それを次に、みんながどう行動に移してくれるかを見ていきたいと思つています。

(座談会は2月5日に行いました)